北前船：日本の特質を運ぶ

北前船は、商船。江戸時代（1603–1867）から 20 世紀の変わり目にかけて、北日本と大阪の間を行き来していた。北前船は、各地の港に停泊、取引をしながら、日本海側沿いの航路を辿り、本州南の先端周辺まで航海していた。北前船が運んでいた物は、日常生活に欠かせない昆布から工芸品まであった。そして、北前船は、現在私たちが知る日本文化に、多大な貢献をした。

小さな船から大きなビジネスになるまで

北前船のルーツは、石川県に深くかかわっている。（現在の石川県とその周辺の）加賀藩からの船は、大阪での米の取引をするために、1639 年に初めて、本州の南端周囲を航海した。陸路での輸送には膨大な時間がかかり高くついた当時としては、この航路は有益だった。

数十年前、加賀藩出身の船員たちは、近江（現在の滋賀県）出身の豪商たちに率いられた、北の島の北海道を探検する遠征隊の主要乗組員だった。このような船員たちの多くは、自らの北前船に乗るようになり、北海道の港は、航路の主要な停泊港となった。

初期の北前船は小さく、帆が一つしかない船で、北日本-大阪間を一年に一往復しかできなかった。1870 年代までには、船は 4 つの帆が持てるほどの大きさになり、何百トンもの物資を運べるようになった。そして、一年で 3、4 往復するようになった。

1800 年代の半ばまでには、北前船の船主たちは、航路沿いに運んで売る商品に、高い値をつける商売によって日本で最も富裕な商人になった。北海道産の商品の中で最も利益を得たのは、油と肥料に使われるニシンと、出汁に使われる昆布だった。船主たちは、故郷である石川県の橋立（加賀）や黒島（輪島）などに大きな家を建てた。

20 世紀への変わり目頃には、北前船は衰退していった。電信技術が発展したため、商品の値段交渉が、各地から即座に行われるようになり、北前船船主たちは、自由に商品の価格を上げることが制限された。一方で線路の拡大により、日本海沿いでの輸送をめぐり、市場での競争が導入された。

続く国内への影響

北前船は、毎日の必需品と高級品の両方を日本海側沿いに運んでいた。北前船が輸送した生活必需品は、作られ、収穫されたところから遠く離れた場所で、地方文化の一部となった

昆布は、北前船によって北海道から日本のほとんどへもたらされた。そして、日本国内で、昆布は料理には欠かせなくなった。昆布は、出汁を作るために使われ、現在の数多い典型的な日本食の鍵となる食材だ。石川県では、昆布はまた、刺身と蒲鉾を包むためにも使われる。能登半島・七尾での和ろうそく作りは、ここに停泊していた北前船に依存していた。

また、北前船は、米や塩など、多くのものを石川県から日本の他の地域に運んでいた。1800 年代半ば頃までには、北前船は、輪島塗や漆器といった工芸品の輸送を始めるようになり、輪島塗は石川県外でも人気となった。

北前船の遺産をじかに見学する

北前船が石川県の文化遺産へ与えた影響は、石川県周辺の観光名所で見てとれる。おそらく、その出発点に一番ふさわしい場所は、加賀市の北前船の里資料館だ。この資料館は、裕福な船主によって 1878 年に建てられた、広々とした邸宅の中にある。この資料館は、航海用道具、船箪笥、船の測りの模型などを展示している。この資料館は、畳や囲炉裏とともに、歴史的な住まいの雰囲気を保っている。頑丈な松の梁と漆塗の木の表面が、内装に高級感を添えている。橋立を囲む地区は、多くの北前船船主の拠点であった。彼らの鮮やかな赤い瓦屋根の邸宅のいくつかは、この地区に残っている。

他の北前船船主の多くは、輪島の黒島地区の出身である。この地区には、黒い瓦屋根や木板の壁と格子戸があり、江戸時代とほとんど変わらない様相を呈している。角海家住宅と天領北前船資料館では、北前船と船主の生活について、より詳しく知ることができる。

七尾の一本杉通りは、北前船のおかげで栄えた。北前船はここに停泊し、市の港で取引をしたからだ。店舗のいくつかは、昆布など、かつてこの船によってもたらされた商品を、現在でも販売している。この通りには、1800 年代の終わり頃からの建物があり、中で店を営業している。

山中温泉は、加賀地区の山中にある温泉保養地だ。山中温泉は、北前船船長と船員に人気の冬の保養地だった。彼らが口ずさんでいた唄は、「山中節」と呼ばれる地元の唄に影響を与えた。芸者は、現在、街の中心にある山中座で毎日山中節を上演している。